

はじめに

心を豊かにする染め織り

むかし話の『つるのおんがえし』を知っていますか。おじいさんに助けられたつるが、人にばけておんがえしのためにおこなっていたのが機織りで、布を織っていたわけです。これが「織り」です。「染め」は、布や、布になる前の糸を染めることです。この2つを合わせて「染め織り」といいます。

みなさんの身の回りには染め織りがたくさんあります。身につける衣類、部屋の中の敷物や布団、出かけるときのバッグなど。染め織りに囲まれながらくらししていると、いえるでしょう。また、染め織りは、ただ寒さや暑さから身を守ったり、道具を運んだりするだけでなく、肌触りのよさや、見た目の美しさも求められます。好みの肌触りやデザインのものを身につけることで、気分もちがってきます。お気に入りの服を着て出かけるときは、ウキウキした気持ちになるのではないのでしょうか。

また、日本の伝統的な染め織りは、世界と比べてみても、とても多彩です。さまざまな交易から染め織りの布や技術を取り入れながら発展し、そこから日本の風土やくらしに合わせながら進化していき、いまでも受けつがれている、たいへん貴重な文化のひとつといえます。

この本では、種類や歴史、染め織りの技など、さまざまな角度から染め織りを紹介しています。知れば知るほど日本文化の奥深さを感じ、染め織りのすばらしさがわかってくることでしょう。



▲「虫干しの図」豊国画

染め織りによる着物を大切に長く着るために、むかしからおこなわれていた「虫干し」という習慣がえがかれた浮世絵です。冬の晴れて乾燥した日に着物を出して、空気にふれさせることで、湿気によるかびや虫食いを予防します。

もくじ

染め織りの世界へようこそ・・・・・・・・4

各地の伝統の染め織り・・・・・・・・4

染め織りの種類と見方・・・・・・・・8

布のつかわれ方・・・・・・・・11



染め織りの技を見てみよう・・・・・・・・12

かすり織りのスゴ技・・・・・・・・12

型染めのスゴ技・・・・・・・・16

錦織りのスゴ技・・・・・・・・18



巨大どん帳づくりを見てみよう・・・・・・・・20

技術革新で生まれた布の活躍・・・・・・・・22

コースターづくりにチャレンジ！・・・・・・・・24

もっと染め織りを知ろう・・・・・・・・26

染め織りの歴史・・・・・・・・26

見直される着物文化・・・・・・・・30

染め織りにまつわる祭り・・・・・・・・30

染め織りの仕事をするには・・・・・・・・31



染め織りの世界へようこそ

各地の伝統の 染め織り

日本には、伝統的な染め織りの種類がとても豊富にあります。そのうち、経済産業大臣指定伝統的工芸品に認定された染め織りを紹介します。

※地図に示している情報は 2023 年現在のものです。赤色の工芸品は写真で紹介していますが、緑色の工芸品は名称だけの紹介です。

①首里織

琉球王府の中心地であった首里でつくられてきた織りもので、おもに王府用であったため、格調が高く、高品質なのが特徴的です。種類は豊富で、首里緋、首里花織、首里花倉織、首里道頓織、首里ミンサーなどがあります。



首里緋
琉球王府時代につかわれた
絣織物の発注用の「御絵
図」にえがかれていたデザ
イン画を元に復元したもの
です。

(安座間美佐子 作)



首里花織
浮織ともいわれ、よこ糸を浮かして模様を表現しています。



首里道頓織
両面つかうことができるのが特徴です。

②琉球びんがた

沖縄を代表する伝統的な染めものです。一般的に布を染めるのには染料をつかいますが、沖縄では顔料をつかうことで、強い太陽の光に負けない鮮やかさを保ちます。またアイ（藍）で染める藍型もあります。



沖縄県

- ・首里織①
- ・琉球絣
- ・南風原花織
- ・読谷山花織
- ・読谷山ミンサー
- ・知花花織
- ・喜如嘉の芭蕉布
- ・久米島紬
- ・宮古上布
- ・八重山ミンサー
- ・八重山上布
- ・与那国織
- ・琉球びんがた②



どろ染めにより、丈夫で美しい布になります。

③本場大島紬

鹿児島県の奄美大島でつくられてきた絹織りものです。ごく細かいかすり模様が特徴で、糸をかすり染めするときに専用の締機をつかいます。また、どろをつかったどろ染めによる光沢のある黒色は格別です。



新潟県

- ・小千谷縮⑬
- ・小千谷紬⑭
- ・塩沢紬
- ・本塩沢
- ・十日町絣
- ・十日町明石ちぢみ

山形県／新潟県

- ・羽越しな布

北海道

- ・二風谷アットウシ⑮

山形県

- ・置賜紬

福島県

- ・奥会津昭和からむし織

群馬県

- ・伊勢崎絣
- ・桐生織

茨城県／栃木県

- ・結城紬⑫

埼玉県

- ・秩父銘仙⑪

東京都

- ・東京染小紋
- ・東京手描友禅
- ・東京無地染
- ・本場黄八丈⑩
- ・村山大島紬
- ・多摩織

愛知県

- ・有松・鳴海絞⑧
- ・名古屋友禅
- ・名古屋黒紋付染

大阪府

- ・浪華本染め

長野県

- ・信州紬

徳島県

- ・阿波正藍しじら織

④博多織

織りによる模様は、よこ糸で表現するのが多いのですが、博多織ではたて糸で表現します。しっかりと織りこまれた生地は帯として締めやすいと評判ですが、最近では着物地としてもつくられています。



⑦京小紋

京都で発展した型染めです。いまま伝統的な技法を用い、和紙を重ねた型紙をつかい、米ぬかのりを混ぜた染料をつかうなどして、おもに絹地を染めます。



染め織りの種類と見方

染め織りにより生まれる布には、さまざまな分類方法があります。ここでは、染め織りを理解するために知っておきたい分類について、紹介します。

【糸の素材による種類】

原材料となる糸の種類によって布の種類を分類する方法があります。日本でむかしから現在まで多くつかわれているのが下の3種類ですが、このほかにもコウゾ、パショウ、フジなどの植物性の糸や、明治時代からは毛（ウール）もつかわれてきました。

絹

中国や朝鮮半島から伝わった素材です。カイコガの幼虫が成虫になるためにつくる「まゆ」の繊維で糸をつくります。つやがあり、しなやかな布ができ、むかしから高級素材としてあつかわれています。

綿

メンカ（綿花）という、植物の種子をおおう白いわたから繊維をとり、糸にします。吸水性がよく、肌触りがやさしいため、肌着や手ぬぐい（現在のタオルやハンカチ）などに向きます。木綿とも呼びます。

麻

布になる麻はおもに3種類ありますが、日本ではカラムシ（苧麻）が多くつかわれてきました。くきの繊維をほくしてつなげ、糸にします。通気性があり、張りのある繊維で、夏向きの素材とされています。

まゆ

メンカ

カラムシ

【先染めと後染め】

布をつくるには、糸をたてよこに交差させて織ることで、線が面になります。そして布には色や模様がついていることが多いですが、織る前（先）に染めるのか、後に染めるのかで先染めと後染めという2つの種類に分かれます。布をつくる流れで見ていきましょう。

布をつくる流れ

糸づくり

植物繊維や動物の毛などから糸をつくります。繊維1本では弱くあつかいにくいので、2本以上をより合わせて（ねじり合わせる）1本の糸にすることがほとんどです。

糸を染める

糸を輪状にまとめた、写真のような「かせ」というかたちにして染液につけて染めます。ここで部分的に色を染めると、かすり糸になります。

織る

染めた糸を、たて糸とよこ糸に分けて織機で織ります。

織る

白糸を、たて糸とよこ糸に分けて織機で織ります。

布を染める

白生地を染料で染めます。さまざまな技法で模様を入れたり、絵をえがいたりします。

先染め

織ることで模様を表現するため「織りもの」とも呼ばれます。

後染め

布になってから染めて模様を表現するため「染めもの」とも呼ばれます。



【織りの三原組織】

たて糸とよこ糸が交差して布になる構造を、織りの組織といいます。やみくもに交差させても布にならず、ほどこやすくなることもあるのです。ですから、布となる基本の三原組織があり、これらをもとに変化させて、複雑な織り方が生まれています。

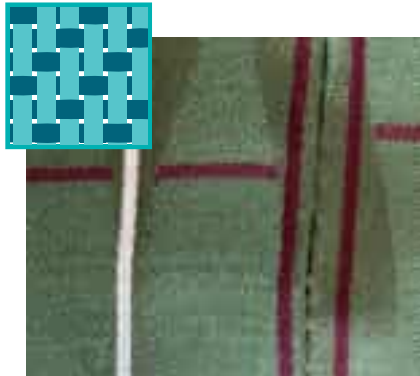
平織り

たて糸とよこ糸を1本おきに上下に交差させて織ります。たて糸を上下させる綜絞（14ページ参照）は2枚必要です。もっとも単純な織り方で、丈夫に仕上がりが、多くつかわれています。密に織れば帯になり、ゆるく織ればガーゼにもなります。



綾織り

たて糸とよこ糸を1本おきに、2本ずつめがしながら織っていきます。細かな筋が現れるのが特徴で、綜絞は3枚以上必要です。平織りより少し弱い生地になりますが、伸縮性が生まれて服の生地にしたときに体になじみやすく、シワになりにくい布になります。



朱子織り

たて糸を4本以上浮かせて織り、5枚以上の綜絞が必要な織り方です。たてよこの交差が少ないため、とてもなめらかな触り心地で、絹糸などで織るとつやのある布になります。同時によれやすく、糸がひっかかりやすいという性質を合わせもちます。



【先染め+平織りの模様】

単純な織り組織の平織りでも、糸の染め方、つかい次第で、さまざまな模様の布がつくれます。一例を見ていきましょう。

無地



単色の模様を無地といいます。糸から染めて織ると、染料がしっかりとしみこむために、色があせにくい布に仕上がります。

しま



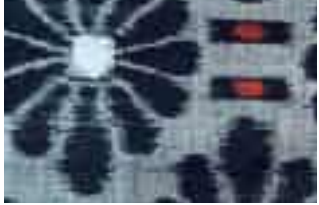
たて糸またはよこ糸に2色以上つかうとしま模様の布ができます。1色の糸を並べる本数で、しまの太さが変わります。

格子



たて糸とよこ糸、それぞれ2色以上つかうと格子になります。たてよこ2色をつかうと、同色が交差したところの色がこくなります。

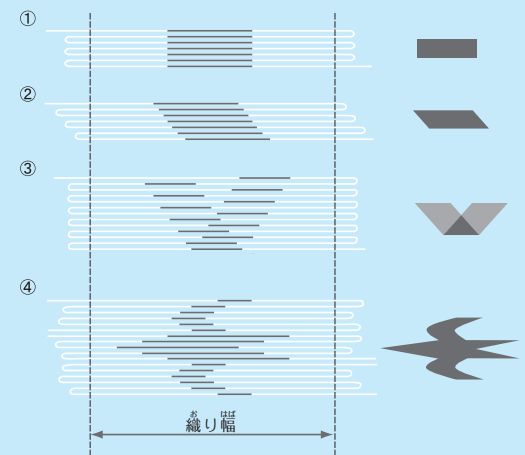
かすり



1本の糸を2色以上のまだらに染めて織って表現した模様をかすり模様といいます。絵柄を表現するには緻密な計算が必要です。

首里織のよこがすり「手結」の技法

かすりの技法は産地によりさまざまです。1つのパターンで複数の模様を表現できる沖縄の首里織の技法「手結」を紹介します。布の織り幅より少し長くよこ糸を用意して、部分的にひもでむすんで染めてかすり糸にしたものを、そのまま織ると、長方形の模様ができます①。少しずつ斜めにずらすと平行四辺形になります②。糸の本数を増やし、交互に左右にずらすとV字になります③。さらにかすり染めの幅を2種類にして、複雑にずらすと鳥の模様ができます④。



染め織りの技を見てみよう

かすり織りのスゴ技

部分的に防染した糸をつかい、模様を織り出すのがかすり織りです。沖縄の首里織※の伝統を受けつぐ那覇伝統織物事業協同組合の、安座間美佐子さんのかすり織りの技を見てみましょう。

※首里織については、4 ページで紹介しています。

1つずつの作業を手を抜かずに
きちんとやることで
納得できる布に
仕上がります！



首里織の手縞とは

たて・よこに交差するしまにかすり模様を入れた織りものを、首里織では手縞と呼びます。しまの間隔や大きさ、かすり模様の種類はさまざまです。ここでは、手縞の技を紹介します。



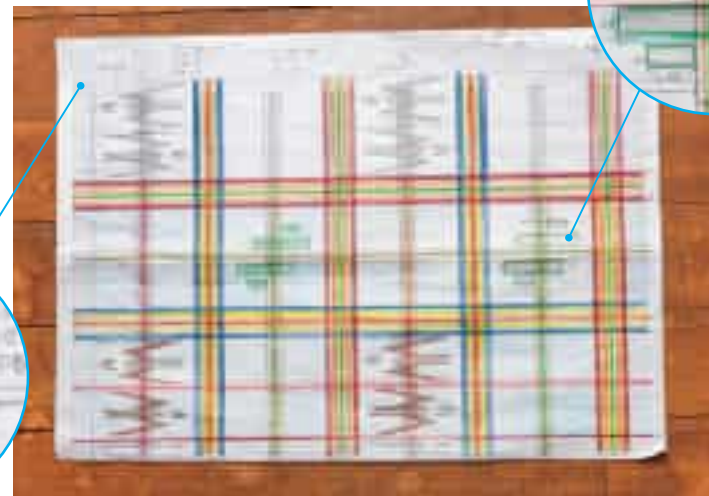
『鳥』（ルバース・ミヤヒラ吟子 作）

手縞づくりの工程は約 60 も！

手縞には、地の部分になる「地糸」、しまをつくる「しま糸」、かすり模様にするために部分的に染める「かすり糸」が必要です。さらにこれらをたて糸とよこ糸それぞれに染めなければなりません。できた糸を織機にかけ、織り上げて製品になるまでには、合計約 60 もの工程が必要で、数か月かかります。

1 デザインを決め、設計図をつくる

デザインの発想は人それぞれです。このとき安座間さんは、以前、アイ（藍）で染めた糸が、時間を経て定着してよい状態になってきたので、つかいたいと考えていました。また、一般的にかすり模様は白で表現しますが、藍染めた糸を生かした色のかすり模様にしたいと思いながら、デザインしたそうです。鳥は沖縄の固有種であるヤンバルクイナをイメージしています。方眼用紙に、はじめはイメージをえがき、少しずつ具体的に、しまの幅や色、かすり模様の大きさなどを決めるなどして何度かき直し、最終的な設計図となったのが右の写真です。



左上に糸の色と必要な分量を計算してかきとめています。各かすり糸も模様の長さと同幅ごとに必要な本数を計算して明記。斜線のしま糸は、2色以上の糸をより合わせてつくる「ムーディー（もく糸）」を示しています。

2 地糸・しま糸を染める



右の青い糸が1年以上前にアイで染めた糸です。アイは時間をおくことで色が定着し、落ち着いた色味になります。



つかっている植物染料

青～水色	アイ（ひたす回数で濃淡を表現）
赤み～ベージュ	ティカチ（オキナワシャリンバイ）
黄	フクギ
オレンジ	フクギ+アカネ
黄緑	アイ+フクギ

3 整経

たて糸の長さや本数、必要量を整える作業を整経といいます。糸枠に巻いた糸を数本まとめて持ち、回転式整経台に巻いていきます。設計図にかいた色糸の本数を、ここで準備します。つづいて、整経した色糸を、図案通りに並べかえる「しま割り」をおこないます。



回転式整経台